

大学図書館による展示

大学図書館のお宝 お見せします

■跡見学園女子大学

<八重と花蹊～二人のハンサムウーマン～>

本学の学祖跡見花蹊と大河ドラマで人気の新島八重とはほぼ同時代に生きた女性である。今回の展示では、二人の生きた時代を年表にし、比較できるようにした。

二人とも 87 歳、88 歳と高齢で亡くなるまで強く時代を生き抜いた女性たちである。花蹊は、摂津国木津村の大庄屋に生まれる。父の営む寺小屋を助け、花蹊自身も漢学、絵画、書道、琴、三味線、裁縫などを修め、10 代半ばで扇画や屏風の揮毫をしたといわれている。

その後、京都に上り父と私塾を経営し、明治 3 年（1870）上京。東京神田中猿樂町で跡見女学校を開学し、その後の跡見学園の基礎を築いた。

開設当初から公家などの子女教育に優れ、女性の生きるための力になる学問を教えた。特に点茶に力をいれ、形式的なしつけ教育より茶道を学ぶことで人格教育、書画の知識、お客様のおもてなしなど総合的に学ぶことができると考えた。

こうした点は八重にも通じ、八重も茶道を重視し、武士のものであった茶道を女子教育に応用した。

おもてなしのところが注目をうけている今、跡見花蹊や新島八重が目指した女子教育の理想は、社会から注目を集めるものになっている。



■国立女性教育会館

<棚町コレクション at NVEC>

ー自伝・伝記にみる女性の活躍ー

皆さん、国立女性教育会館をご存じだろうか？ 当会館は、昭和 52 年に当時の文部省の附属機関として設立された、男女共同参画社会の形成を目指した女性教育に関する日本で唯一のナショナルセンターである。女性教育情報センターは、その中で専門図書館として図書・雑誌・新聞記事など男女共同参画に関するあらゆる情報の収集・発信を行っている。

今回出展した棚町コレクションは、女性教育情報センターが所蔵しているコレクションの一つで、故棚町知彌氏が女性の社会的自立をテーマとして収集した昭和期の女性の署名本のコレクションである。1,500 冊以上の中から、主に現在活躍している女性の自伝 10 冊を選びすぐって展示した。社会で活躍している女性の自伝を読むことで、ひとりひとりの個性と能力を発揮する「男女共同参画社会」を考え、広く女性のエンパワーメントにつながることを期待した。

また、今回、本の展示と併せて、展示で取り上げた著者の新聞記事をパネル展示した。本だけでは見えてこない、著者の生身の声を感じていただけたと思う。

当日は、来場されたお客様を始めとし、大学図書館、高校図書館の司書さんなど、たくさんの方々に本を手にとっていただいた。

<<出展した本（一例）>>

●有森裕子『わたし革命』 ●大宅映子『だから女はおもしろい—女の常識 女の視点』 ●落合恵子『母に歌う子守唄—わたしの介護日誌』

棚町コレクションの詳細は以下まで。

<http://www.nwec.jp/jp/center/tanamachi.html>



■埼玉大学

＜河川の国 ～荒川を中心に～＞

生き物にとって必要不可欠な水。21 世紀の今日においても依然として深刻な洪水や渇水等水を巡る様々な問題が発生している。

本学では、身近にある河川について関心を持って学ぶことで、河川との関わりから“水問題について考えていただく”をテーマに埼玉県之母なる川“荒川”の資料を中心に河川に関連する資料の展示を行った。

今回の展示では、展示内容についてのクイズ形式の設問を用意し、来場者とスタッフのコミュニケーションを図った。来場者からは、本学の教員や附属学校の教諭が作成に協力した小学生向け教材資料や現在県が行っている“川の再生”の取り組みについてご質問をいただくなど河川について認識を深めていただく貴重な機会になったと思う。



また、埼玉大学図書館の所蔵する資料が県内公共図書館を通じて取り寄せできる「**埼玉県内図書館ネットワーク**」のサービス等、当館の行っている地域連携活動についても紹介した。

■芝浦工業大学

＜つなぐ未来の橋＞

本学図書館は「橋」をテーマに橋に関する関連図書と学生作品であるアーチ橋とコラボレーションを組んだ展示を行った。

きっかけは学生の立ち上げたプロジェクト「**A4 コピー用紙で橋を作れ!**」である。これは棒状に丸めた紙のパイプを木工ボンドでつなぎ合わせて人が渡れる橋を作ろうというものである。学生は難問であったパーツ接合部の強度問題を「**菱形 12 面体**」を用いて解決した。“橋の構造”“紙”“多面体”というキーワードから図書館では学生の活動を支援するべく資料を提供し、学生と一体となって活動を支援した。本展示に用いた橋と紙と多面体に関する資料の関係は、学生が見出した強度の仕組みの発見に由来するものである。

当日はこの作品について多くの反響をいただいた。強度の仕組みについて、又はこの技術の応用についてたくさんの質問が飛び交い、工学に対する皆さんの多大な関心を感じた。

展示物は①綿棒で作ったアーチ橋の模型、②A4 コピー用紙で作った橋の歩道パーツ、③学生の“橋”プロジェクトポスター、④図書館員と学生とで選書した当館蔵書一橋の構造・デザイン及び図鑑と、折り紙・多面体の数理一に関する図書、⑤図書館広報誌『OH! MY LIB CAFE』である。

今後も我々は本学学生のものづくりに対する意欲と取組みに応えられる図書館として学生活動を支援していきたい。



■城西大学

＜Cool Japan 浮世絵の魅力＞

ー 外国人から見た日本の美 ー

18世紀末、オランダ人により日本から初めてヨーロッパへ渡った「浮世絵」。その後、1862年のロンドン万国博に出品されたのをきっかけに、ヨーロッパに「浮世絵ブーム」が広がり、今もなお世界中で愛されている。

今回の展示では、外国人向けに海外で出版された浮世絵関連の資料や実物大の画集を展示すると共に、本学水田コレクションから東洲斎写楽と喜多川歌麿作品の複製画7点も展示した。この複製画は、実物と同様に版木を彫り、手漉き和紙、水性の顔料を使用し江戸時代の技法「順序摺り」の工程を経たものである。長い年月の風合いを感じさせる実物と違い、当時の摺りたての色彩や風合いを楽しむことができる複製画は、現代の彫師、摺師の職人技が窺える作品でもある。展示会場では資料の見学と共に、この順序摺りを体験できるコーナーを設け、五枚の版木、水性の顔料、手漉き和紙による東洲斎写楽の「四代目岩井半四郎の乳人重の井」を摺る体験をしていただき、多くの方が作品を持って帰られた。

なお、水田コレクションは本学入学式・卒業式・大学祭の際に水田美術館にてご覧いただける。西洋美術にも影響を与えた浮世絵の魅力を展示と体験を通して感じていただける場となった。



■女子栄養大学

＜病人を作らない食事ー創立 80 年ー＞

本学は今年創立 80 年という節目の年を迎えた。創立者の香川昇三・綾は、当時国民病とも言われた「脚気」の克服には胚芽米に含まれるビタミン B1 が有効であることを確証した。真の医者とは病人を診るよりも病人を出さないことに鋭意するべきと考え、1933（昭和 8）年に自宅で「家庭食養研究会」を開き、栄養学の普及活動を始めた。これが、「食により人間の健康の維持・改善を図る」ことを建学の精神とし、栄養学の実践・普及に努めてきた本学の原点である。

今回は、栄養学の黎明期から現在までを、鈴木梅太郎著『ビタミン』や島蘭順次郎著『脚気』といった昭和初期の資料から、近年の栄養学関連資料まで、時代に沿った展示を行った。また、普及活動の一端を担った本学出版部刊行物から四群点数法の資料も紹介した。ビタミン B1 の分子模型や誰が作ってもおいしい料理が作れるように考案した「計量カップ・スプーン」、そして胚芽米と白米を実際に見ていただき、胚芽米の特徴や有効性などを理解していただいた。

配布資料・本学「学食メニュー集」

・「四群点数法さわやかカード」

・「創立者香川昇三・綾の軌跡」

資料を手にとって真剣に読む方、家族の健康について日々の思いを語る方、分子模型に興味深く見られる方など、多くの来場者の様子から、健康に対する関心の大きさを改めて窺うことが出来た。



■聖学院大学

＜来日 190 周年記念！シーボルト『日本』＞
Nippon : Archiv zur Beschreibung von Japan : vollständiger Neudruck der Urausgabe zur Erinnerung an Philipp Franz von Siebolds erstes Wirken in Japan 1823-1830.

1823 年(文政 6 年)、シーボルトが長崎にオランダ商館付きの医官として来日して 190 年。帰国するまでの約 6 年間に江戸参府旅行にも同行するなど、調査・研究・収集した資料を基に、帰国後著した『NIPPON』を展示した。彼の研究は動植物にとどまらず、日本及び周辺地域の地理・歴史・民族・言語・社会・宗教・文化に至るまで膨大かつ多岐に渡り、55cm × 37cm の大きな資料に描かれた細密画は来場者の目を釘付けにした。また、シーボルトがアジサイを新種記載した際に、楠本滝に因んで Hydrangea otaksa と命名されたというエピソードは有名で、『日本植物誌』も来場者の関心を引いた。

＜Book Review の取り組み＞

教員や学生が本に対する熱い思いを映像を使って伝えるという取り組みを「わたしたちの Book Review」と題して紹介した。書評も映像になることによって、より具体的に理解しやすく身近に感じてもらえる。またツールとして使用した iPad mini にも、来場者は手にふれ興味をもたれたようであった。



■東洋大学

＜『存在の謎に挑む哲学者』～明治期日本の心の近代化につとめた井上円了～＞

東洋大学の前身哲学館の創立者である井上円了は日本を代表する哲学者であり、学校教育・社会教育に生涯を捧げた明治期屈指の教育者・研究者である。今回の展示は井上円了に焦点をあてたものである。

円了は明治維新の十年前、越後長岡藩にある寺院の跡取りとして生誕し、創設間もない東京大学文学部哲学科第 1 期生として入学し、卒業時には他の理・法・医をあわせた卒業生 47 名の総代となる英才であった。

円了は生涯に 3 回の海外視察を行うなど先進的で、この体験から日本と東洋の伝統的思想・文化継承の大切さを実感し、教育活動や全国巡回講演など独自の活動を展開し、国家の発展や人々の精神の向上に力を尽くした。

明治期の日本は、鬼や怨霊といった「怪奇現象」が信仰や物語・絵画などの形をとって人々の間に定着しており、これを実際のものとして信じる民衆も多かった。円了は、日本が近代国家になるためには、この世のあらゆる「不思議」な現象を合理的に解明し、人々から迷信を取り除くことが必要であると考えていた。円了はそうした資料を積極的に収集につとめ研究を行い、その成果が日本最初の科学的な妖怪研究へと発展し、「妖怪学」として実を結んでいくことになる。

今回の展示では、自らを「不思議庵主人」と称し、不思議な存在に「妖怪」の名を与えた円了の生涯と著作の一部を紹介した。



■文教大学

＜教科書コレクション ー往来物から Web教科書までー＞

「文教大学」と聞くと、教員養成を思い浮かべる方も多いのではないだろうか。

本学の教員養成開始は、昭和 28 年(1953)、東京都品川区旗の台に前身の**立正学園女子短期大学**が開学した当時までさかのぼる。昭和 41 年(1966)には、現在の文教大学がある**越谷キャンパス**に 4 年制の**立正女子大学家政学部**が開学し、昭和 44 年(1969)には教育学部初等教育課程、中等教育課程国語専攻・英語専攻が新設された。

以来、大学名変更、男女共学化、人間科学部、文学部の増設を経て 40 年余り、主に教員を目指す学生の学習・研究用として、本学は埼玉県下でも有数の**教科書コレクション**を所蔵し、大いに利用されている。

今回は日本の教科書を、近代以前の「**往来物**」から近未来の「**デジタル教科書**」「**Web教科書**」まで展示した。「デジタル教科書」「Web教科書」は教育界最先端の話題であり、本学教育研究所所長・**今田晃一**教授のグループが研究を行っている。来場された方々は戦後の教科書に「懐かしいねえ」と見入り、iPad のデジタル教科書にはしきりに感心しながら手に触れてご覧になっていた。

＜展示内容＞

- (1) 往来物：『**庭訓往来**』『**萬國往来**』ほか
- (2) 明治期/大正期の教科書(復刻版)
- (3) 戦前/戦後：墨塗り教科書(復刻版)ほか
- (4) 昭和(戦後)の教科書(1947 年～1988 年)
- (5) 平成の教科書(1989～2012 年)
- (6) 現代の養護学校教科書
- (7) デジタル教科書/Web教科書(2013 年 4 月刊行/本学教育研究所所蔵)



■ものづくり大学

＜「ピーター・F・ドラッカー&上田惇生文庫」開設のご案内＞

本学では、2013 年 11 月に**ピーター・F・ドラッカー**氏の主要著書が日本語で読める本を上田惇生名誉教授の寄贈により「**ピーター・F・ドラッカー&上田惇生文庫**」として開設した。ものづくり大学の英語名「**Institute of Technologists**」は、上田惇生名誉教授の仲介により、開学前にピーター・F・ドラッカー氏により命名された。

今回は、その本と 2013 年 11 月 3 日に行われた市民特別公開講座「**ドラッカーとその世界**」で上田惇生名誉教授、**岩崎夏海氏**(「もしドラ」著者)、**井坂康志氏**(ドラッカー学会事務局長)が講演された概要を紹介し、映像を流した。

加えて本学のホットな話題として、製造学科の高大連携の取り組みとして、**埼玉県立岩槻商業高校**と製造学科の**松本研究室**による共同制作プロジェクトのパネル紹介と、マスターモデルの造形を 3D プリンターで実演した。初めて見る 3D プリンターに足を止めて頂いた方からは、制作工程の質問が多くあり、3D プリンターに興味を持って頂けたようだ。

また昨年続き、ゴーヤの緑のカーテンによる夏の図書情報センターの魅力の一つを知って頂けたかと思う。

今回の展示では、ピーター・F・ドラッカー氏の魅力をより多くの方に知って頂けたとともに、市民特別公開講座の 3 名の講師のそれぞれのピーター・F・ドラッカー氏との繋がりや思いが込められた講演内容により、様々な方面から感じることができたと思う。



大学図書館の お宝 会場配置図

平成25年12月1日（日）10:00～16:00
桶川市民ホール・さいたま文学館
1階ギャラリー1

